

NEWSきのくに

きのくに活性化センター

 〒646-0031 和歌山県田辺市湊1655番地の4
 田辺市民総合センター内
 TEL&FAX 0739・26・9670

 発行責任者: 中田 肇
 発行日: 2003年10月20日

きのくに活性化センター後援事業

「ダイビングをととした教育・福祉・地域の 活性化プログラムづくり」

— 事業の将来を担う若者の育成 —

和歌山大学にスキューバダイビングのサークル

この事業は、スキューバダイビングのインストラクターの知識と技術と経験を活かした体験型観光プログラムや社会教育・福祉プログラムを、大学関係者、串本ダイビング環境会議(串本のダイビングショップ14店が加盟)、野外活動の専門家、自治体などと共同で開発・企画・実施することを目的としています。

今年度最も力を入れている事業は、県内のひきこもり・不登校の若者のための共同作業所と共同で企画・実施する「マリンキャンプ in 串本 2003」です。(10月21日から3日間実施予定)。今回のキャンプには、県内の作業所に通う高校生と作業所のスタッフ約30名が参加し、プールでのダイビング講習、体験ダイビング、地元海産物のシーフードBBQなどを行います。来年度以降、県内の作業所のスタッフや高校生の協力を得ながら、全国のひきこもり・不登校の中高生を対象に年2回程度のマリンキャンプを企画・実施していきたいと考えています。



事業をサポートする高校生、大学生リーダーの育成も平成15年度の重要な課題で、夏以降、串本で研修を行っています。和歌山大学では今春スキューバダイビングのサークルが立ち上がり、メンバーが夏期休暇中に合宿を行い、串本ダイビング環境会議のスタッフから指導をうけました。サークルはこれからも紀南の海をベースに研修を続けていきます。県内の作業所のスタッフや高校生、OBも「マリンキャンプ in 串本 2003」の開催に向けて研修を行いました。

事業の将来を担う「若い力」がすくすくと育ち始めています。

和歌山大学が「地域貢献特別支援事業」に選定。

文部科学省は、国立大学と自治体が連携して行う優れた地域づくり事業に対して新たに「地域貢献特別支援事業」を予算化しました。全国の74大学が申請し、和歌山大学を含めて26大学が選定されました。和歌山大学は、「きのくに活性化支援センター」をはじめ多様な形でこれまで地域との連携事業を行ってきましたが、今年2月に和歌山県との間に「地域連携推進協議会」を設置するなど大学の地域貢献について組織的な体制を整備したことが選定につながりました。事業は2年間で、今年度の予算は4,200万円です。

和歌山大学のプランは「地域資源を活用した紀伊半島みどりの地域づくり支援」と名付けられ、紀伊半島の豊かな自然や歴史・文化遺産を活かしながら「循環型社会の形成」「持続的発展」という今日的課題に対処する新たな地域づくりを目指しています。

プランは全体で5事業・10プロジェクトで、そのうちの「地域内資源循環システム構築・推進プロジェクト」「半島の海を活かした健康・医療・福祉プロジェクト」は「きのくに活性化支援センター」が直接関与するプロジェクトです。他のプロジェクトも紀南地域を対象にしたプロジェクトが多く、「きのくに」として協力関係を持ちながら事業を進めていきたいと思っています。

地域貢献特別支援事業プロジェクト

紀伊半島の森林保全と地域内資源循環システムの構築事業

- ①地域内資源循環システム構築推進プロジェクト
- ②紀伊半島の森林Co2固定能力の向上計画プロジェクト(印南町)

地域づくり・生涯学習を支えるサテライトの形成事業

- ①学習拠点紀南サテライトキャンパスプロジェクト
- ②地域づくりを支える図書館機能の整備プロジェクト

紀伊半島の地域学習と資料づくり・IT化事業

- ①地域資源の学習教材とIT化と利用推進プロジェクト
- ②紀伊半島の自然観察データの蓄積・普及プロジェクト

紀伊半島みどりの文化・歴史環境の再生・活用事業

- ①紀伊半島エコミュージアム構想の推進プロジェクト(美里町、本宮町など)
- ②歴史的環境残存地区の評価と再生計画プロジェクト
(中辺路町野中地区、田辺市中心市街地、南部町、南部川村)

半島環境を活かした福祉システムの構築と健康・癒しの事業

- ①半島の海を活かした健康・医療・福祉プロジェクト(串本町、古座町)
- ②地域福祉システムの構築と住環境モデル構想プロジェクト(南部町)

人材育成プログラムより

「地域をつくる 人をつくる」をテーマに地域づくり人材育成研修プログラムが昨年11月に行われました。研修会には、地域づくりの先進地から3人の講師を招きそれぞれの地域づくりについて講演されました。NEWSきのくに第3号では、地域プランナー、田舎丸ごと販売研究家の松崎了三さんの講演をダイジェストで紹介しました。今回第6号はそれに引き続き、社団法人四万十楽舎楽長山下正寿さんと京都府大宮町中西敏行さんのお話を掲載します。

廃校舎活用と地域

社団法人 四万十楽舎楽長 山下 正寿

昨年、南紀熊野21協議会主催の「地域をつくる、人をつくる」研修会に参加させていただいた折に、木造校舎・上秋津小学校の再活用についてお話を聞く機会を得ました。

そのお一人、秋津野塾アドバイザーの谷中康雄さんから大工として上秋津小学校建設に関わっていたことを知らされ、心動かされました。私の父も元大工で、大工さんの苦勞や誇りを少しは解っていたからです。

さっそく、翌朝8時にメンバーの方たちと上秋津小学校を見せてもらいました。昭和29年に完成し、築50年近くになるのに、そのがっしりとして風格のある木造校舎に驚きました。階段は、子どもたちが踏み続けることを想定して、節の多い厚い板をつかっていましたし、雨の降りかかる場所の板も工夫が見られま



した。谷中さんのお父さんが責任者で地区の大工10人と職人衆の力で建てられたそうで、全てが手仕事だと聞きました。思いのこもった木造校舎です。

現在、全国的に農・山・漁村地域において若者が流出し、少子化の影響で廃校舎が増えています。この10年間に全国で廃校舎が2,000校となり、体校舎を入れるとその倍以上の学校から子供たちの声が消えたこととなります。特に創立100周年を越えた学校がなくなることは、学校の鐘やチャイムと共に暮らしてきた地域の高齢者にとっては、未来を失うような精神的打撃を与えています。

一方で、廃校になった学校をもう一度地域のセンター、新しい地域再生のシンボルとして建てなおそうとする取り組みが全国に広がろうとしています。

大量生産大量消費の流れが崩れ、古き思い出のある建物を残そうとする価値観の変化が廃校舎再生の人々のエネルギーとなっています。

先日、上秋津小学校の木造校舎の活用について地域で話し合いが進みつつあるという嬉しい知らせを、谷中さんからいただきました。

地域の再発見

京都府大宮町 町議会議員 中西 敏行
(当時、大宮町町民課長)

私が産業振興課にいった当初、地域のほとんどの人は、「自分たちの村は10年か20年後には野になるだけで消えてしまう。」

「早く村から縁を切りたい。」と考えていました。65歳以上のお年寄りが30~40%を占め、村が老人天国になることを喜ぶ老人がいる一方で、若者たちはこんな村は嫌だというような状況でした。地域の課題は主に、高齢化、過疎化、農業基盤の悪さ、山が荒れていること、祭りやコミュニティーがなくなること、もっと言うと、村が消えることでした。

課題解決に470億ものお金がかかるという夢のような大きな計画ができましたが、夢を夢で終わらせないようにみんなでひとつひとつ具体化していこうという地域のみなさんの強い思いを受け、私ども役場は地域のみなさんの立場に立って補助金をとってくるという役割をしました。こうして事業ができたことで、役場と地域の関係は非常によくなったと思います。

私どもが村づくりを進めてきた中に、「常吉村」という地区があります。村の課題を解決するための拠点として「常吉村営百貨店」を創りました。何でもあるから「百貨店」であり、百



貨店と同じスタイルで営業していますが、物を売るだけが仕事ではありません。本来の目的は地域の課題である農業面、高齢化、子供たちの将来について総合的に取り組むことです。例えば、お年寄りの対策として、元気に今までどおり過ごせるような体制づくりを一生懸命考えています。店長さんは注文の品を配達する際、必ず独居老人の家に寄って安否を気遣ったり、用事を聞いたりして声をかけながら地域を回ります。独居老人で閉じこもりがちだった方も、地域の集団的にやっている農作業にもちょこちょこ出てくるようになりました。ジャズコンサート、花火大会なども仕掛けています。これらのことは、村を元気にするというよりも、むしろ都会に行った人が自信をもって自分の村はあそこだと言えるような村づくりを意識して行っています。そうすることによって、安心して自分の生まれた地域に帰ってこられるような仕組みづくりをしています。

今、私が考える中で一番大事な問題は、市町村合併に対してどういうふうにかつくりをしていけばいいかということです。自分の村をいいところだと思って、いろんなところを隅々まで見て歩けば、なすなが咲いている。たったそれだけで、自分の村をいいところだと実感できるとおっしゃられた方がいました。私たちも今まで村づくりをやってきた中で、じっくり自分の地域を見てみますと、本当に素晴らしいところだなど思っているところが見えるようになりました。みなさんも地域を再発見する中で、自分の住んでいる地域がいいところだなど思えるような取り組みをやっていたらなと思います。

熊野古道の世界遺産登録と登録後の保全について

紀伊山地の世界歴史遺産登録については、10月13日から3日間、国際記念遺跡会議による最終現地調査が行われ、来年6月に開かれる第38回世界遺産登録委員会で登録の可否が決定されます。

熊野古道が奥の細道、中仙道と共に日本三大古道に指定され、更に、国の文化財の指定を受けることになって20余年の歳月が過ぎました。当時熊野古道とは、そして道が町の何処を通っているのか、それを知る人は全く少なかった。勿論私もその一人であまりにも無知だった恥じらいの中で、この道を歩きその歴史を学ばなければとの思いで、その思いを一にする友に呼びかけ、昭和53年春、初めて古道を歩き、勉強会を立ち上げました。以来機会ある毎に古道を歩き、ときには道の補修、道標の作成と建立等のボランティア活動をしてきましたが、当時の里人の古道に対する関心は乏しく、そればかりか古道を歩き、道の補修につとめる私たちの行動を嘲笑していました。この道が今、世界の歴史遺産に登録されようとしています。

歩んできた20有余年を思い起し感無量です。

しかし、登録されても今後の保全管理は簡単なものではありません。古道と古道周辺の環境保全条令が制定されてはいます

が、条令での規制で完全な保全ができるものではありません。まず最も必要なのは、町民が歴史遺産に対する認識を深め積極的な協力がなされる事です。

しかし、来年登録されるであろうこの道の何処から何処まで登録されるのかなど知る町民もきわめて少ないのではないのでしょうか。

まず教育委員会等による更なる啓発を望んでいます。

そして、今後この道の補修等については、従来のように森林組合に委託しておけばということだけでなく、熊野古道をよく知る者に委託していくことが望ましく、周辺の自然林の育成にあつても、杉、桧の育成のプロだったらできるという安易な考えを改めていかなければ、大きな過ちを起こすことになります。

そのために早急に、保全委員会のようなものを立ち上げ積極的な提言を求めながらこの尊い遺産を守り、更にこれを後世に遺していく責を果たしていきたいものです。



漂探古道会長
中辺路町観光協会
会長

木下 幸文

地域はいま

～田辺市の地域経済～

田辺商工会議所 事務局長 藤本 薫

田辺市は和歌山県の海岸線のほぼ中央に位置しており、海と山に囲まれた温暖な気候の下、梅、みかんに代表される農業や、黒潮の恩恵を受けた豊富な魚種に恵まれた漁業のほか、工業として梅干し加工、水産加工など原料立地型の食品加工業、労働力立地型のボタン製造業、そして戦後の復興期を背景に昭和30年代には地場産業の中核としての地位を確立し大きく発展した製材業など地域資源を活用した地場産業が発達してきました。

また、紀南の中心地である田辺市では、古くから人や物の交流と集積を通して商業が発展、江戸時代には安藤氏の田辺領3万8千石の城下町として栄え、当時の保護政策のもと地域の代表的な産業として発展を遂げ、市内中心部を拠点に紀南の中核都市として、周辺10力町村からなる田辺広域圏の産業、文化、経済の中心機能を担い、和歌山市に次ぐ県下第2の都市として発展してきました。

しかしながら、今日においては、大きな産業構造の変革の中、かつて隆盛をきわめていたその主要な地場産業であるボタン製造業や製材業においては、生産地の海外移転や海外製品との競合あるいは価格競争の激化等により、転換を余儀なくされて転廃業が進み大きく衰退しています。

また、一方では長期の景気低迷が続く中、市街地の拡大による居住地の郊外化等により、郊外での大型店出店やコンビニエンスストアの進出が増加し、くわえて、消費者ニーズの多様化やモータリゼーション化などによって、消費者の流れは既存商店街から郊外への大規模小売店や中規模専門店へと移行する傾

向が顕著となり、商店街においても空き店舗が増え商業施設の様相が大きく変化しつつあります。

このような状況下の中、田辺市では官民一体となり賑わいのある町づくりを模索し、商店街整備や各種ソフト事業を実施していますが、一昨年に完成したアオイ通り商店街や銀座商店街、また、今年度より事業着手した海蔵寺地区の道路拡幅事業等により商業活性化を目指した新たな街並みが出来ようとしています。

また、平成16年度夏にも供用が開始される扇ヶ浜の海水浴場や、国のITビジネスモデル地域の特区分指定に基づく新しいビジネス環境の充実、また、熊野古道の世界遺産登録を機とした新たな観光産業の構築等、地域の特性を活かした街づくりを目指しています。

近づく広域行政合併や近畿自動車道南部インターの開通等、とりまく環境は大きく変革しようとしています。自然環境に恵まれた豊かな地域の資源を活かし、特色のある街づくりを目指してこそ、活力ある紀南の中核都市として今後の発展が期待できるものと考えます。

～編集部から～

NEWSきのくに第6号では、最近注目を集めている高野・熊野世界遺産登録に関連して、漂探古道会長・中辺路町観光協会会長の木下幸文さんに原稿を書いていただきました。編集部では、世界遺産登録の期待が高まる中ががんばる人、がんばる地域を今後も紹介していきたいと思ひます。